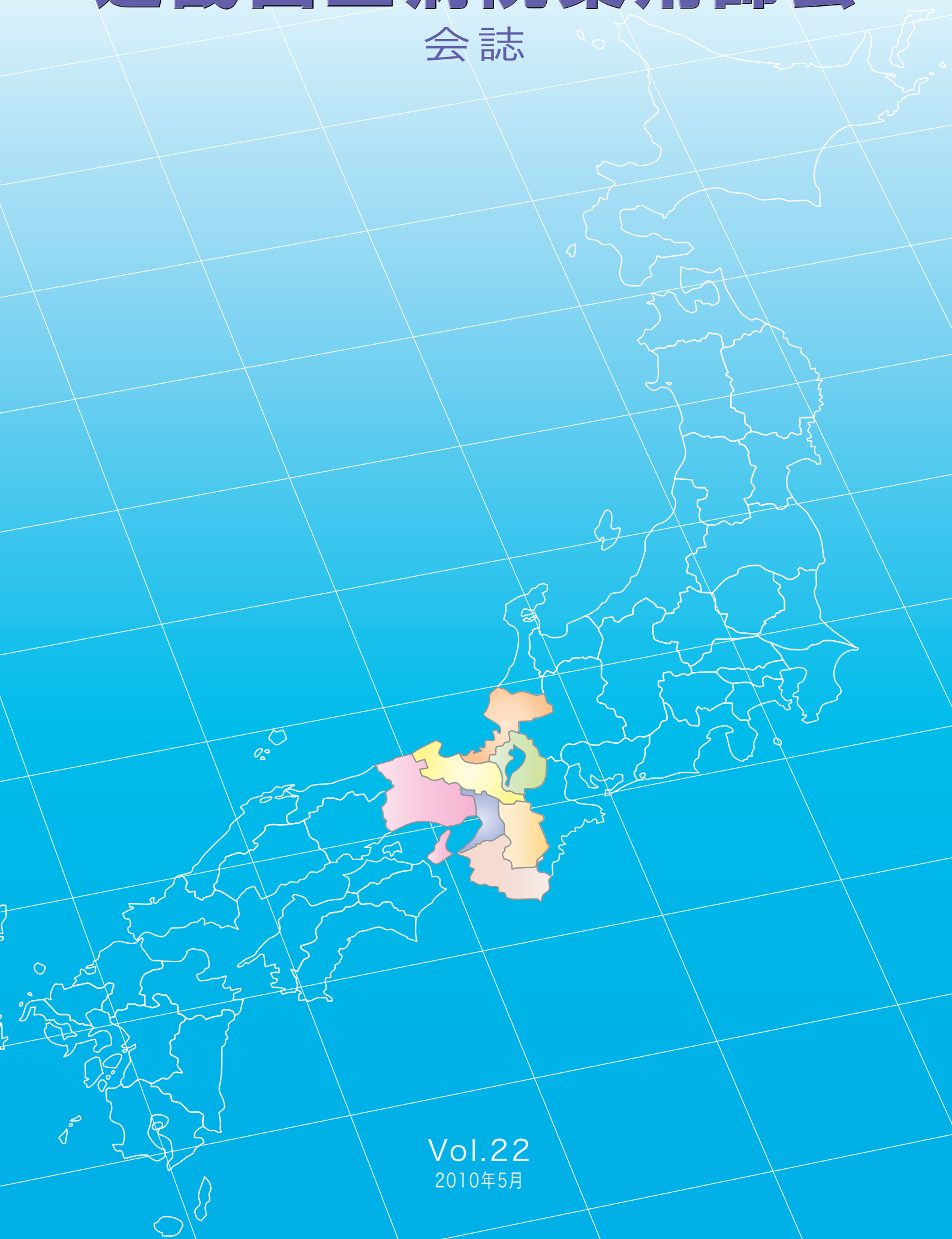


近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.22
2010年5月

目 次

薬剤科紹介 南京都病院	2
南京都病院 山田 雄久	
第 31 回日本病院薬剤師会近畿学術大会に参加して	5
大阪医療センター 木原 理絵	
平成 22 年度 近畿国立病院薬剤師会学術集会及び講演会報告	6
近畿中央胸部疾患センター 宮部 貴識	
平成 22 年度 新採用薬剤師研修会に参加して	8
大阪南医療センター 畑 裕基 近畿中央胸部疾患センター 中森 由佳	
病院薬剤師になって	11
刀根山病院 堀尾 有加	
当院の HIV 感染症診療の現状と専門薬剤師として携わった 1 年を経過して	12
大阪医療センター 矢倉 裕輝	
編集後記	13

薬剤科紹介



〈環境〉

当院は、京都市と奈良市のほぼ中間、山城盆地中央部の城陽市に位置しています。城陽市には青い空、輝く太陽、あふれる緑、澄みきった水などの恵まれた自然に加え、近隣には正道官衙遺跡、平川廃寺跡、森山遺跡、久津川車塚、丸塚古墳、芝ヶ原古墳など、古い歴史を物語る古墳や史跡が数多く残されています。「梅まつり」の季節になると、最寄りの JR 奈良線山城青谷駅前には赤いのぼりが飾られ、駅前に立てられた案内板に従って約 2^{キロ}、時間にして 20 分ほど歩くと、甘い香りが漂う青谷梅林が広がり、白や淡い紅色の花が、あたり一面に咲き競っています。梅は市の木に指定されており、当院のシンボルマークにもなっています。

〈概況〉

当院は、結核はもとより、非結核性呼吸器疾患（肺がん、呼吸不全、喘息、慢性気管支炎等）、重症心身障害、小児慢性疾患、神経・筋疾患、長寿医療、慢性肝疾患、脳卒中リハビリ並びに一般疾患の診断と治療を主体とした診療機能を持ち、専門性を生かした高度医療の充実を図っています。

医療法病床数 370 床（結核病棟、重心病棟を含む）、標榜診療科 15 診療科を有し、1 日平均入院患者数 286.5 人、外来患者数 167.7 人、新患率 8.8%、紹介率 48.7%、逆紹介率 44.0%です（平成 22 年 1 月現在）。病院の理念に目標「分かりやすく安全で、安心して受けられる、質の高い医療の提供」を掲げ、各部門は理念に基づいて日々の業務に取り組んでいます。



〈薬剤科について〉

薬剤科のメンバーは科長、副薬剤科長、主任1名、常勤薬剤師3名（うちCRC1名）、非常勤薬剤師1名で構成されています。平成22年度の薬剤科の目標として「病院経営と診療への貢献、調剤過誤と院内における薬剤関連インシデント防止システムの検討、教育・研修の充実、臨床研究の充実・強化」を掲げ、薬剤科スタッフ一人一人が意欲と充実感を持ち、楽しく仕事ができるよう努めています。

当院は地理的に近いことから、平成21年4月、同志社女子大学と学術交流などで連携する包括協定を締結しました。昨年度はICT勉強会へ講師の招聘、薬学生に対する実務実習事前学習の講師派遣、新型インフルエンザ講習会の開催などに加え、入院されている患者さま・御家族を対象に開催された院内コンサートや、重心病棟で開催された秋祭りに同志社女子大学声楽科やジャズクラブの学生さんに参加していただくなど、幅広い交流を深めています。一方、研究面では同大学臨床薬剤学研究室においてイトラコナゾールの血中濃度測定を実施していただき、先発品と後発品、剤型による血中濃度の違いなどについて共同研究をすすめています。大学の先生方も時間のあるときは呼吸器科カンファレンスに参加いただき、様々な角度から情報交換を行い、コメントや評価・指導をいただきながら、当院スタッフの薬学的知識や診療の向上に努めています。

今年度の薬学部長期実務実習生は、実務実習指導薬剤師2名を中心に指導することとしており、1期1名、合計3名の受け入れを行う予定です。小回りのきく当院ならではの取り組みとして、カリキュラムに他職種の講義も取り入れ、「医療・医療人を知る」機会を提供していきたいと考えています。京都府は病院薬剤師会と開局薬剤師会が一本化されたこともあり、顔の見える連携を深めたいと考え、当院の呼びかけで、実務実習の実施にあたり、近隣の病院・保険薬局との実習に関する情報交換を実施しています。

来年夏頃に完成する新病棟の建替整備に加え、オーダーリング・電子カルテの導入も検討しており、新しいシステムなどの整備は、今年度の課題のひとつとなっています。

後発医薬品については、前年度54品目を切り替え、採用品目比率は目標の20%を超えました。今年度から、後発品採用状況を薬事委員会にて毎回報告し、各委員の意識向上に努めることとしています。

抗癌剤の無菌調製は平成22年3月から呼吸器科入院患者を対象に化学療法レジメンの登録・管理を行い、調製を開始しました。今後、調製時間・スタッフの配置等問題点を検討した上で、順次対象を拡大する予定です。

薬剤管理指導業務は今年度、薬剤師CRCの専従・治験薬調剤件数の増加・薬学部長期実務実習生受け入れ等に伴い、前年度実績（225件/月）の指導件数確保は困難な状況にありますが、定期的に科内会議を開催し、薬剤師－薬剤師、薬剤師－病棟間の連携およびシステムの効率化を検討し、より充実した薬剤管理指導業務が行えるよう、スタッフ一丸となって取り組むこととしています。

治験業務は前年度、組み入れ症例数が30名に達し、契約金額も前年度の2倍を超える数字を達成することができました。実施は主に神経内科を中心にアルツハイマー病・パーキンソン氏病の治験を行っています。昨年度問題となったCRCの不足も、薬剤師専従CRCの増員で、ある程度解消できるものと期待しています。今年度は神経内科以外の診療科での治験実施に向け、積極的なアプローチを図ることとしています。

チーム医療としては、ICT、NST、化学療法、褥瘡など幅広く治療に参画し、各部門間の連携強化や問題点の共有・解決に取り組んでいます。
小規模ながら、一通り病院薬剤師に必要な知識と経験を学ぶことができ、一步進めて、専門分野を持ちながら臨床研究を進めることができる、そんな薬剤科を目指して、日々業務に励んでいます。



(文責 山田 雄久)
(次回は刀根山病院です)

第31回日本病院薬剤師会近畿学術大会に参加して

大阪医療センター 木原 理絵

2010年1月30・31日、京都で開催された第31回近畿学術大会にて、「メトホルミンの使用調査—腎症合併例での適正使用の検討—」という演題で発表させて頂きました。

メトホルミンはインスリン抵抗性改善効果や脂質改善効果など、近年多くの臨床試験でその有効性が再評価されており、肥満合併糖尿病患者への第一選択薬と考えられています。

本剤は腎排泄型であり、腎機能障害では投与禁忌となっていますが、添付文書上その具体的な数値は示されていません。そこで今回、CKD(Chronic Kidney Disease)ガイドラインに基づき、メトホルミンがCKD患者に対し適正に使用されているか調査し報告しました。

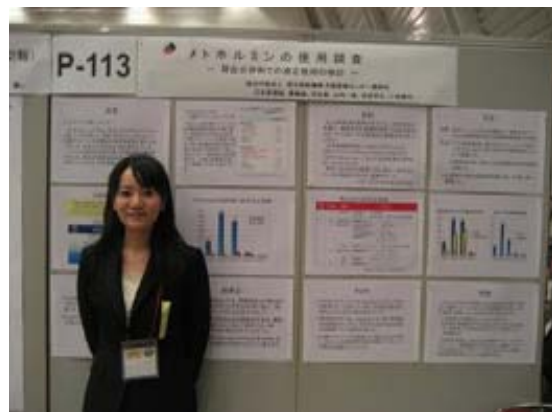
今回はポスター発表であり、示説の時間はわずかでしたが、糖尿病治療に携わる薬剤師や研究員など、多くの方から質問を頂きました。質問の内容は専門的なものが多く、中には抄録から予め質問を用意して来られた方もおられ、その研究熱心さに感心させられました。

他施設の先生方との意見交換を通じて、研究に対する視野を広げることができ、また、今後本剤を使用している患者に薬剤師としてどのように携われるか、新しい見解を得ることができました。

また、ポスター見学や一般口演では様々な薬学的分野での最近のトピックスや、他施設での取り組みを知ることができ、とても有意義な時間を過ごせました。学会は自己研鑽の場として最適であり、今後も積極的に参加していきたいと思えます。

今回の発表を通して、文章を簡潔かつ過不足なくまとめること、図表の効率的な使い方など、見る人が如何に分かりやすい発表にするかを学ぶことができました。

このような発表の機会を与えて頂き、御鞭撻を賜りました先生方に深く感謝申し上げます。



平成 22 年度 近畿国立病院薬剤師会

学術集会及び講演会報告

近畿中央胸部疾患センター 宮部 貴識

平成 22 年 3 月 13 日に天満研修センターにて学術集会ならびに業務検討委員会主催講演会が参加者 111 名のもと開催された。演題は以下の通りであり、活発な意見交換が行われた。

○学術集会演題

1. 投与中止後のリファンピシンによりポリコナゾールの薬物動態が影響を受けた一症例
循環器病センター 山下大輔
2. 姫路医療センターにおける持参薬チェックの取り組みと課題
～お薬手帳の有効活用をふまえて～
姫路医療センター 黒岩仁美
3. 嚥下困難患者において、テモゾロミド簡易懸濁法を用いた一例
南和歌山医療センター 辰己晃造
4. 注射薬自動払出機による注射薬調剤
大阪南医療センター 中西彩子
5. 電子カルテ・リプレースを終えて
ーリプレースへの道程と機能改善による今後の業務支援への展望ー
京都医療センター 高田雅弘
6. ーナイフ治療患者へのワークシート利用の有用性
国立循環器病センター 島田しのぶ
7. 気管支喘息における吸入薬の服薬指導
姫路医療センター 壺阪直子
8. 小児科病棟における薬剤管理指導業務への取り組み
大阪医療センター 梅原玲緒奈
9. 入院時薬歴管理業務の取り組み
神戸医療センター 中筋千佳
10. チーム医療の中での乳癌外来化学療法に対する薬剤師の取り組み
南和歌山医療センター 堅田絵里
11. 骨折の疼痛管理にコデインリン酸塩を使用した2症例
大阪医療センター 中本有香
12. 腎細胞癌に対するソラフェニブの副作用報告
大阪医療センター 福田良子

13. 薬・薬連携の第一歩 ～カペシタビンの適正使用を目指して～
京都医療センター 瀬戸口由
14. 感染制御におけるICT従事薬剤師の関わり
国立循環器病センター 中蔵伊知郎
15. がん専門薬剤師認定制度の日本医療薬学会への移管に関する問題について
大阪南医療センター 北村良雄
16. 日本病院薬剤師会がん専門薬剤師3ヶ月研修の実際
大阪医療センター 松山和代

○講演会

演題 「がん性疼痛管理における薬剤師の関わり」

講師 国立病院機構大阪医療センター がんサポートチーム専従医師 里見 絵里子先生

国策としての緩和ケア、がん性疼痛治療、緩和ケアにおける薬剤師に期待されることについて、急性期病院での緩和ケア活動の現状や症例をまじえたがん性疼痛治療戦略、オピオイド鎮痛薬の各論、最近の話題や治験状況まで詳細にご講演頂いた。チーム医療の中の薬剤師として、専門的な視点、症状管理の習熟、コミュニケーションスキル、系統的な治療の理解、多職種連携が重要であると結ばれた。

平成 22 年度 新採用薬剤師研修会に参加して

大阪南医療センター 畑 裕基

4月17日、大阪医療センターにおいて開催された新採用薬剤師研修会に参加させていただきました。初めての研修会で、なおかつ他の国立病院の先生方との交流も出来るということで楽しみ、でも少し心配…非常にワクワクしていました。

講義の内容は、「業績評価について」、「薬剤師の専門性について」、「医療安全について」、そして医療安全についてのワークショップでした。

業績評価についてですが、まずこのようなシステムがあることに驚きました。国立病院機構の職員として自覚をもち、各病院・薬剤科の年度目標から自分自身の1年間の目標を設定し、達成を目指すことは、自分一人では難しいことだと思います。特に我々新任は右も左もわからず、目標は設定したもののそれが適切か、目標へのアプローチが正しいのかを判断することは容易ではありません。その点、業績評価は周りの先生方からのアドバイスや叱咤激励をいただける良い方法なのだと思います。

薬剤師の専門性では、専門薬剤師について御教授いただきました。私は以前から専門薬剤師に興味があり、何かしらの専門性を持ちたいと考えていました。形の見えやすい目標になりますし、専門薬剤師になることで患者様や他の医療従事者のお役に立つことが出来ると思うからです。講義では専門薬剤師に求められる業務、資質、資格を取るためにやるべきことなどを分かりやすく説明していただきました。まずはジェネラリストになることから一步一步、確実に勉強していきたいと思います。

医療安全については、これから薬剤師として勤務する上で欠かすことのできない問題だと思います。我々薬剤師のミス防止は当然のこと、患者様が適切な治療を受けることが出来るよう、薬剤師が医療事故を積極的に防がなくてはいけない、そのために出来ることは数限りなくあると感じました。

座学の後、3つのグループに分かれ医療安全についてのワークショップを行いました。私、少々声が大きくございますので、僭越ながら司会役をやらせていただきました。ある医療事故を元に皆で問題点をあげ、改善策を練りました。私一人だけでは絶対に出てこないアイデアが次々出て、感心しました。とてもエキサイティングでした。司会役としてグループの皆さんの意見を時間内にまとめ上げることは上手く…とはいきませんでした。本当に良い経験をさせていただきました。

研修会の後、懇親会を行っていただきました。非常に明るく賑やかな会になりました。他の病院の先生方と1対1でお話しさせていただき、貴重な時間を過ごすことが出来ました。国立病院機構の大きな特徴である施設間との横の繋がりの強さが印象的で強烈に心に残っております。

座学、ワークショップそして懇親会と、非常に密度の濃い1日でした。講義で学んだことはもちろん、先生方や同期の皆との繋がりを大切にしていきます。

最後になりましたが、このように盛大な研修会を企画・運営していただいた先生方に改めて感謝いたします。有り難うございました。

平成 22 年度 新採用薬剤師研修会に参加して

近畿中央胸部疾患センター 中森 由佳

4月17日に大阪医療センターで開催された新採用薬剤師研修会に参加させていただきました。まだ薬剤師として働き始めたばかりの私は知らないことだらけであり、当日は期待と不安でいっぱいでした。しかしいざ始めてみると、内容も興味深く、また、他施設の同期の仲間と意見を交わす場もあり、とても充実した一日になりました。

今回の研修会では、これから国立病院機構の薬剤師として働く上で心に留めておかなければならないことをたくさん教わることができました。

まず、「近畿中央胸部疾患センターの薬剤師」としてだけではなく、どこでも通用する「薬剤師」として成長していくためには、業績評価制度を有効に活用することがとても大事だと感じました。マナー・接遇、チームワーク・協調性、自己管理など項目ごとに分けて評価を行っていただけのため、何が自分に足りていないのかを認識することができるし、自分自身の考えだけで漠然と考えるのではなく、色々な医療の場をご存じであり、それぞれ違った見方をしていただける先輩方の意見を聞きながら業務にフィードバックしていくことはとても大切なことだと思いました。自分の能力を把握し、目標を持ち業務を行うことは、業務の質の向上、つまりは患者様への良質な医療の提供につながっていくと思うので、業務評価を有効に活用しながら、医療の質の向上、自分自身の成長につなげていきたいと思います。

また、専門薬剤師についての講義では、専門薬剤師の導入により効果や安全の面で有益な結果をもたらすという事実があるにもかかわらず、日本では未だに専門薬剤師の質の保証と質の向上をもたらす仕組みが確立されていないこと、また、専門薬剤師と一般の薬剤師の違いが社会的に認知されていないということを知りました。日本においても専門薬剤師の存在がもっと活かされるためにも一般の薬剤師も、日々の業務はもちろん、興味をもった分野はどんどん勉強し、専門薬剤師の質を押し上げていくことが必要なのだと感じました。私はまだ働き始めたばかりですが、薬剤師として必要なことをしっかり習得し、その上で興味を持った分野を広い視野で勉強して、専門薬剤師についても詳しく理解し、自分の目標の一つにできたらいいなと思いました。

医療安全についての講義、グループディスカッションでは、医療現場における「うっかり」は、重大な事故に繋がることを痛感しました。日々の業務を進めていく中で慣れてきても、大事なことはきちんと心に留めておき、また、新しいことに目を向けていく姿勢を持ち、安全な業務につなげたいと思います。また、疲れがたまってしまうと意識を集中させるのが難しく、自分の体調不良が引き金となり院内感染にもつながりかねないので、医療従事者として自分自身の健康管理をしっかりしようと思いました。

今回のグループディスカッションでは、皆が意見を言い合ったところ、意見の内容は違えども似ていることがあり、また、そういった考えもあるのか、と気付かされる点が多くありました。皆が働いている環境や、今まで医療について学んできたことはそれぞれ違うため、このような場で意見交換をするということはとても大切なことだと思いました。ま

た、薬剤師に必要とされる能力は幅広いものになるのだなあと実感しました。これから自らの勉強はもちろん、周りの薬剤師の皆さんの話も聞きながら、考えて動ける薬剤師になりたいと思います。また、意見を交わす中で、自分の思い描いている内容を実際に皆にわかりやすく説明するのはとても難しいことだと実感しました。相手にわかりやすく簡潔に物事を伝えるのは、患者様への服薬指導においてはもちろん、他の医療スタッフとの連携においても必要なことだと思うので、コミュニケーションが的確にできるように努力していきます。

今回、このような貴重な研修会を開催していただいた先生方に心から感謝致します。

病院薬剤師になって

刀根山病院 堀尾 有加

私はこの春から、刀根山病院で病院薬剤師として勤務しています。私は薬が大嫌いな子供で、薬を飲ませるのにとっても苦労したと母から聞いており、薬を扱う薬剤師という職業に興味を持ったのがきっかけで、薬剤師を目指すようになりました。病院薬剤師となり、この職業がとても忙しく大変なものだと気付きました。私は大学や大学院では部活や研究に没頭し、多忙な毎日を送っていたため、体力や精神力は人並みにあると思っていましたが、今はまだ日常業務をこなすだけでへとへとになってしまいます。働き始めて約1ヶ月、毎日の業務をこなしていくなかで、日々何か新たな発見をし、何か失敗し、それを繰り返すことで多くのことを学んでいます。

私が常に気をつけていることは、ミスのないようにすることももちろんなのですが、常に明るく謙虚でいることです。まだまだわからないことばかりですが、少しずつでも知識を習得できるように前向きな姿勢を大切に、積極的に聞くようにしています。薬剤師という仕事は、小さなミスが大きな事故につながることもあるため、わからないことをそのままにするのではなく、まずは自分で調べ、それでもわからないことは『聞く』ことが大事だと感じています。次に、コミュニケーションを円滑に行うためには、明るさが必要となってくると思います。病院薬剤師には病棟での服薬指導という業務があります。患者さんに薬の説明をするためには、患者さんとのコミュニケーションはもちろんのこと、患者さんの情報をより多く得るために、他の医療従事者とコミュニケーションをとることもとても大切になります。私は人見知りをしてしまう性格だったため、少しでもコミュニケーション力を高めたいと思い、心理カウンセラーの勉強をして資格を取得しました。勉強をして感じたことは、相手の気持ちを汲み取り会話することが重要だということです。病棟に行き服薬指導をするようになれば、相手の表情、言葉、しぐさなどに敏感になり、患者さんだけでなく他の医療従事者とのコミュニケーションも大切に、信頼される薬剤師になれるよう努力したいと考えています。

私はまだまだ知識も経験もありませんが、少しずつできる業務を増やし、少しでも早く諸先輩方のような一人前の薬剤師として働けるように頑張ろうと思いますので、ご指導宜しくお願いします。

当院の HIV 感染症診療の現状と 専門薬剤師として携わった 1 年を経過して

大阪医療センター 矢倉裕輝

昨年、当院の HIV 感染症診療の現状と専門薬剤師の役割についてご報告させて頂きました。今回は HIV 感染症専門薬剤師として HIV 感染症診療に携わった 1 年間とその中で感じたことをご報告させて頂きます。

まず当院での現状について、この 1 年間で抗 HIV 薬の導入に際し、薬剤師が新たに関わった患者数は 165 名（平成 22 年 4 月末日現在）で、累積の患者数は 1200 名を超えました。ただ一昨年と比較すると増加数は若干減少しました。これは昨年流行した新型インフルエンザが一因と考えており、今年度は昨年を上回るペースで増加しています。

業務環境の大きな変化は 2 つあり、専門薬剤師の外来常駐化と認定薬剤師養成研修の研修生受け入れです。外来の常駐化については、昨年 4 月より 2 名が HIV 感染症診療の専従となり、1 名が感染症内科外来の隣に新たに設置した薬の相談室に、外来診療時間は薬剤師が常駐することにより、以前よりきめ細やかな対応が可能となり、医師、看護師等からの問い合わせについてもこれまでは電話にての対応であったものが、顔と顔を合わせての対応となり、以前より緊密な連携が可能となりました。また、今年の 4 月から新たに 1 名が併任となり 3 名体制となりました。

認定薬剤師養成研修については 1 回 1 ～ 2 名、2 日間の研修が 5 回行われ、全国から計 9 名の方が研修に来られました。来られた方々は、非常に熱心に研修に取り組み、受け入れ側としても非常にやりがいを感じ、モチベーションの向上にも繋がりました。

日常業務においては、一昨年から昨年にかけて新たに 4 種類の抗 HIV 薬が相次いで発売されましたが、いずれの薬剤も従来同様、CYP もしくは UGT といった肝臓の代謝酵素が関与する薬剤であり、相互作用が懸念されるものです。抗 HIV 薬は国内の臨床試験が免除されているため、日本人のデータがほとんどありません。当院は長年にわたり服薬している患者も多く、耐性等の問題により新規薬剤を使わざるを得ない場合があります。新規薬剤の投与を開始する際は、薬物動態等の薬学的観点から情報提供を行っています。また、抗 HIV 薬だけでなく、AIDS 指標疾患である 23 の日和見感染症をはじめ、悪性腫瘍から生活習慣病を合併している場合もあります。そういった際に抗 HIV 薬との薬剤間相互作用および合併症の性質を考慮する必要があり、HIV 感染症のスペシャリストである前にジェネラリストである必要性を感じます。

専門薬剤師として 1 年間携わり、薬剤師の外来常駐によるチーム医療の連携強化、研修生の受け入れ、新規薬剤の発売及び合併症例の増加といった様々な出来事があり、更に知識を深め、経験を重ねる必要性を感じました。専門、認定薬剤師制度は様々な疾患だけでなく薬剤師全体としての認定制度も学会等においても創設されています。認定、専門薬剤師を取得することがゴールではありません。薬剤師国家試験の合格により見えてきた薬剤師像のように、認定取得によりまた違った薬剤師像が見えてくると思います。是非、自己研鑽、モチベーションの維持、向上のために取得を目指して頂きたいと思います。

編集後記

★4月19日、国立病院機構に対する「事業仕分け」が行われました。ネットではテレビ中継も行われたのでご覧になられた先生方も多いと思います。「非公務員型」、「診療事業の縮減」など全体的には改革案が妥当との意見が大半という結論になったようです。「診療事業の廃止」という最悪のシナリオは免れたものの、今後さらに厳しい環境が予想されます。

★宮崎県で蔓延している家畜伝染病の口蹄疫問題。昨年の新型インフルエンザ流行に続き2年連続で感染の怖さを思い知らされます。対策として感染拡大防止のために全頭殺処分など、普段、人の感染に関しては関心があるわれわれも驚くばかりのその対処方法です。一日でも早く畜産関係者の不安を取り除いてほしいものです。

★現政権下での最大の懸案事項であった沖縄米軍普天間基地移転問題。試行錯誤の上結論が出たようです。如何にこの種の問題を解決することが難しいかを改めて認識させられました。まもなく夏が到来する沖縄は、まだまだ後味すっきりしない梅雨空模様が続くようです。

★いよいよ長期学生実習が始まりました。薬学部5年生のフレッシュマン君たち。私の5年生？のときとは大違い。私の勤務している病院へ来ている学生諸君も、勉強熱心であり、実習もまじめに取り組んでいます。彼らが実社会に出て他の医療関係者から「さすがに薬学部6年生の一期生だけのことはある」と言わしめる責任の一端を私たち現場の先輩薬剤師が担っているのかなと思う今日この頃です。

★今月号には日本病院薬剤師会近畿学術大会、近畿国立病院薬剤師会学術大会などの学会報告、また新採用薬剤師の皆さんの研修会報告などいつものように読みごたえのある内容となっています。どうぞ最後まで御熟読ください。

(H.T)

近畿国立病院薬剤師会会誌
発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局
(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

第二十二号 平成22年5月発行
大阪市中央区法円坂2-1-14

発行人 会長 小森 勝也 (大阪医療)

編集 広報担当理事 山崎 邦夫 (南和歌山)

広報委員 石塚 正行 (大阪南) 中西 彩子 (大阪南医療)

廣畑 和弘 (刀根山) 奥田 直之 (大阪医療)

本田 富得 (神戸医療) 東 さやか (大阪医療)

宮部 貴識 (近畿中央) 玉田 太志 (刀根山)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>